

# *A Lost Lady*における Niel Herbert の “Bildungsroman”

志 水 智 子

## Abstract

In Willa Cather's *A Lost Lady* (1923), the heroine, Mrs Forrester is described as a brilliant lady from Niel Herbert's viewpoint. She gradually loses her elegance as a wealthy woman and reveals her instinctive desire and weakness after losing her fortune and her husband. However, since this is Niel Herbert's viewpoint, we can consider that Mrs Forrester wasn't originally so noble or respectable at all, and that, in fact, she was entirely independent. That is, she merely turns out to be a different woman from what Niel Herbert expected and is not "lost" to any things.

As the story progresses, Niel Herbert in turn worships, worries about, and despises Mrs Forrester, whom he finally regards as the most attractive woman in his life. Niel Herbert wavers in his judgment of what is good for him as he matures. The aim of this essay is to explore Niel Herbert's "Bildungsroman" by discussing his sense of women; his view of city and country life; and what he sees as the ideal American spirit.

After his idealization of Mrs Forrester, Niel Herbert views other young girls coldly, vaguely longing for eternal unmarried life without knowing the reality of women. When he enters university, he likes both the city where he will work as an architect and the hometown where Captain and Mrs Forrester welcome him. Neil Herbert esteems Captain Forrester's way of life, though he knows that Captain Forrester's prime is over, and that commercialism no longer allows for such nobility. In the end, by seeing Mrs Forrester's way of life, Niel completed his "Bildungsroman".

## 序

Willa Cather (1873-1947) の *A Lost Lady* (1923) の中で、西部開拓時代に鉄道建設に携わった Captain Forrester の妻、Mrs Forrester は、少年 Niel Herbert の目には、恵まれた特権階級に属する魅力的な女性として映る。だが Captain Forrester の落馬と鉄道建設業からの引退、資産の喪失による Forrester 家の経済状態の悪化、Captain の死、そして時代の変化の中で、Mrs Forrester は生きていくためにそれまでの上品さを捨て、Niel から見ると墮落の一途をたどる。だがこのような夫人の変化はあくまでも Niel が感じたものであると考えれば、Mrs Forrester 自身は本来の自分なりの生き方をしただけであり、Niel が一方的に作り上げた理想像とは違っていたということにすぎない。つまり迷っているのは Niel の Mrs Forrester についての認識の方であり、彼女は本来性を逸脱した生き方をしたわけではないと読むこともできる。

少年であり、未熟であった頃の Niel は Mrs Forrester を崇拜し、心配し、軽蔑し、幻滅し、憐み、深く気遣い、最終的にはかつて彼女の中に見た輝かしい魅力を揺るがないものとして認識する。Mrs Forrester との交遊を通し、Niel は周りの世界や人間に対する洞察を深め、成長する。つまりこの作品は Niel の “Bildungsroman” と考えられる。だが Niel が結末において、少年時代に抱いた夫人に対する未熟な認識を変えたのかどうかは定かではない。Merrill Maguire Skaggs はこの点について、“What Niel accepts in the end is not ‘real life’ but the valid intensity of his childish delight in Marian Forrester” (Skaggs 53) と述べる。Skaggs によれば大人になったはずの Niel はむしろ子供時代の喜びをかみしめ、陶醉しているだけにすぎない。

Cather はこの作品を約五ヶ月で一氣に書き上げた (Skaggs 46)。この作品は、彼女の初期の作品に特徴的な一女性の人生に焦点を当てる形式をとり、

また、“realistic mode”ではなく、彼女がより好んだ“romantic mode”

(Skaggs 47) に傾倒して書かれた。いわば Cather の真骨頂が余すところなく注ぎ込まれた作品と言え、この作品がすぐに人気を博したのも当然であろう。このような作品の中心的人物としての Niel が抱くまさにロマンティックな理想と美意識が、Forrester 夫妻や彼の故郷 Sweet Water の魅力を作り上げるのである。Evelyn Thomas Helmick は、“A Lost Lady displays all of the other prominent elements of the *romancourtois*” (181) とこの作品にみられる宮廷風恋愛のパターンを指摘する。Helmick は、Niel が自分とは別世界の特権階級と思われる人に対して抱く忠誠と、年上の貴婦人に対するプラトニックな敬愛の気持ちを、宮廷風恋愛における若い騎士の思慕にたとえる。Helmick の指摘は、Niel の夫人に対する現実的というよりはロマンティックな認識を表している。Niel の少年時代の Sweet Water の風景や、Forrester 夫妻の様子は、鳥や花、明るい色彩の自然美、宝石などのイメージが多用されて描かれ、それらにはロマンティシズムに特徴的な象徴性が読み取れる。Skaggs による、“In Greek slang, a ‘strayed’ woman is said to be ‘of the sweetwater’.” (Skaggs 50) という指摘は興味深い。作品を読み進めるにつれて、作品に描かれるイメージに備わる象徴性によって、Niel の憧れる人の変化、西部開拓時代の終焉、彼の身上の変化などが効果的に物語られていくことが読み取れる。

Cather はこの作品の中で西部開拓時代の終焉と産業や商業主義の到来という時代の移り変わりの様子を、その過渡期の時代を生きる人々の人生を通して描いている。Joseph R. Urgo はこの作品を、“A Lost Lady . . . demonstrates the intersection of historical and spatial modes of consciousness” (Urgo 82) と述べる。Urgo の指摘するような異種の時代の “intersection” において、価値観が交錯する世代の中で生き方に戸惑うのは夫人や Niel だけではない。少年から成人へと成長する中、また Forrester 氏の活躍した時代から次世代へと時代が推移する中であって、多

感な Niel は何を信念とするかという問題について悩みつつ生きる。本稿ではこのような Niel の人生観の変遷を、彼の女性観、将来に対する展望、移り変わりゆくアメリカ人の理想に対する意識、という三つの観点から考察していきたい。

## I

Mrs Forrester は、少年から成人へと成長する期間の Niel にとって、特別な女性的魅力を持ついわば「永遠の女性」として描かれる。Evelyn Tomas Helmick は、“As object of the courtly worship of young Niel, she, as female principle” (Helmick 183) と表現するが、まさに Mrs Forrester は Niel にとっての女性像の原点であり、女性についての認識を得た源泉的存在である。少年時代の Niel はいわゆるギャングエイジの子供たちとともに遊びやいさかいを共有するが、この際に登場するのはいずれも少年たちばかりであり、彼らが同世代の少女と遊んだり恋心を抱く経験が全くないことは不自然であると同時に意味深い。Niel の青年期においても、夫人の密通相手である Ellinger と結婚することになる Miss Ogden とのかかわりが描かれるのみで、個性や固有名を持つ娘は登場しない。このことは Mrs Forrester が Niel にとって唯一の興味を引く女性であることを思わせる。彼女は Niel にとって絶対的な崇拜の対象であると同時に、Merril Maguire Skaggs が、“Niel wants Marian as a surrogate mother” (Skaggs 53) と、Kathleen L. Nicholos が、“longing for the lost southern lady who was his mother” (Skaggs 189) と表現するように母性的な魅力を備えている。Niel がこのような夫人に対して抱いた強い幻影と理想はその後の彼の女性観をゆがめていく点にまず注目したい。

十九歳になった Niel はいささか批判的なものの考え方をする冷たい雰囲気を持つ若者になる。彼の物腰は次のように描かれる。

His reserve, which did not come from embarrassment or vanity, but from a critical habit of mind, made him seem older than he was, and a little cold. (29)

つまり Niel は冷静な観察眼を持つとする青年ではあるが、裏を返せば何事も一歩引いて眺めてしまい、複雑な人間関係や恋愛に関わる経験に欠ける青年となっている。Niel のように観察者になりがちで、他人を自分が勝手に作り上げたロマンティックな理想像に当てはめてとらえてしまう人物は、Henry James (1843-1916) の小説によく登場する、実人生を経験することを避け、傍観者となる人物達を思わせる。たとえば James の作品、*The Ambassadors* (1903) の主人公 Strether は、青年 Chad と年上の熟女 Madame de Vionnet との関係を理想化し、傍観することで自分の青春を体験している気分になるが、後に現実の二人の関係を知り幻滅する。同じように Niel も理想化した Mrs Forrester のその後の身の振り方を見て幻滅することになる<sup>1</sup>。現実の男女の愛憎について理解できない Niel は、しかし観察者として恋愛に興味がないわけではない。

たとえば Niel は叔父 Judge Pommeroy の蔵書で読書の楽しみを覚えるが、叔父が止めた本である「ドンファン」を迷わず真っ先に読み始める。だが彼は、女性や恋愛に対する興味はあっても、実際にドンファン的なふるまいをする Ellinger を嫌い、その Ellinger と関わる Mrs Forrester を嫌う。Niel は自分が現実に関わる女性の純潔性を強く求める故に、それを侵犯する Ellinger を許すことができない。そして、自分の中で理想化した Mrs Forrester 像を守ろうとするあまり、Niel は極度に気難しく潔癖な観察眼で夫人を監視することになる<sup>2</sup>。十九歳の Niel は、恋愛や人間性の複雑さを体験することのないうちから、独身の叔父のように配偶者に煩わされることなく自分も独身で生きていこうと考えるのである。

このように漠然と独身を選んだ気になっている Niel について、Elaine

Smith は、“It is a sign of his romantic nature” (Smith 146) と指摘する。Niel のロマンティックな思いの対象として Mrs Forrester は誠実で勇敢な夫の貞淑な妻であり、夫とともに衰退していく女性でなければならない。また、Niel は自分よりも年上の夫人の洗練された振る舞いになじみ、さらにそんな夫人を理想化して慕う故に、彼には同世代の Miss Ogden の振る舞いは幼稚に感じられる。彼は Miss Ogden が父親ほど年の離れた Ellinger に恋をしていることを軽蔑するが、彼自身年上の女性の虜になっていることには気づかない。このように理想化した Mrs Forrester へのこだわり故に Niel は自分自身の人生経験は浅いまま、夫人以外の女性に対して冷たく批判的な姿勢を持つ傾向があると言えよう。Kathleen L. Nichols は、未熟で潔癖なだけの Niel の理想が彼の人生観をゆがめる様子を、“Niel is not a celibate ideal, for the life-denying basis of his non-sexual aspirations distorts his angle of vision and forces him to reject — to lose — his idealized lady until time and, eventually, her death place her beyond the world of change and adult sexuality” (Nichols 195) と表現する。自分が理想化した女性像の枠から Mrs Forrester の生き方がずれることを認めることができないまま、その現実と矛盾する夫人のイメージに惹かれ続ける Niel は、自らのロマンティズムと現実の彼女の間のギャップに苦しみ続けることになる。

Niel のロマンティックな女性観は、Mrs Forrester の弱者に対して見せる思いやりや上品な妻としての振る舞いといった行為ではなく、理屈ではない視覚的なイメージによって彼女を表現する際に最もよく表れる。例えば少年時代の Niel にとって Mrs Forrester はジュエリーを身に付けている唯一の女性で、彼女のイヤリングの美しさを彼は忘れることはない。また彼女の笑い声、衣装、優美なしぐさは Niel にとって、その時々の夫人の境遇や内心とは関係なく重要な夫人の属性ととらえられる。つまり夫人の外面的な美しさやイメージは時に彼女の人間性以上に Niel にとっては重要で彼に幸福

感をもたらしている。すると Niel の思い描く理想の女性像とは、清濁併せ持つ人間性ではなく、変わらない美的価値を備えた芸術作品のようだ。それゆえ Niel は、Captain Forrester の不在時に Ellinger と Mrs Forrester が共に一夜を過ごした形跡を認めた際、“he had lost one of the most beautiful things in his life” (79) と描かれるような気持ちになる。この時 Niel は Mrs Forrester の行為を、道徳的ではなく美的に良くないことであると考えるのである。

Niel は Forrester 夫妻の面倒をみるために進学した大学を一年休学するが、Captain Forrester の死後、学校に戻る支度していた彼は自分と同世代の邪な弁護士である Ivy と Mrs Forrester が男女関係にあることを目の当たりにし、完全に夫人に失望し彼女を軽蔑することになる。Niel は夫人に捧げた一年間を踏みにじられたように思う。Niel には夫人の現実の女性としてのセクシュアリティを理解することも受け入れることもできないのである。そして Niel は失望のあまり摘んできていた野バラの花束を捨ててしまう。

この場面をはじめ作品の中ではバラの花やバラの庭が象徴的な意味を帯びて頻繁に描かれる。病身となり静かな毎日を過ごしていた Captain Forrester は、自宅のバラの庭を愛し、その中で日時計を眺めながら長い時間を過ごす。彼の愛する日時計とバラはその永眠後も墓石とその周囲に植えられる花となり永遠に生かされるが、Niel が捨てるバラの花束の方はすぐに命を失うことは示唆的な対比となる。つまり Captain Forrester も Niel も Mrs Forrester を愛しているが、二人の Mrs Forrester に対する理解力には明らかな差があることを二人が持つバラが象徴的に物語るのである。Kathleen L. Nichole も Niel が捨てる野バラを、“a cut wild rose which almost immediately shows the effects of time and decay” (Nichole 193) と、Captain Forrester が愛する日時計と庭のバラを、“symbols of the constant love and loyalty which he gave and received and which can survive the passage of time” (Nichole 194) と述べる。

Nichole の対比は、時の経過にも動じず、そして時とともに変化する夫人の生き方にも動じない、Captain Forrester の夫人に対する変わることはない愛と理解に対して、Niel の夫人に対する気持ちが非常に動じやすくその女性観も未熟なことを示している。故郷を後にする直前において、時代に応じて変わっていく夫人にやきもきする Niel は、人生の複雑さを理解できないまま彼女に失望することしかできないのである。

Mrs Forrester は時代や境遇の変化に柔軟に対応して生きようとしており、また、女性として自然な欲求を持ち合わせた人間である。ダンディーな Ellinger を巡って嫉妬心をむき出しにするし、若い男性との交流を好み、Ivy の悪徳ぶりを分かっているがら寄らば大樹の陰とその経済力をあてにして性的関係を持ってまで彼にすり寄ろうとする。そんな夫人に、古い時代とともに死ななかったという理由で Niel が失望するのは彼のエゴイズムゆえに他ならない。彼女は時代とともに生きながら積極的に自分の欲望を満たそうとする生命力やたくましさを備えている<sup>3</sup>。年月を経、夫人の死後、Niel が彼女に対するかつての苛立ちや失望を完全に解消し、彼女を明るい思い出として懐かしく思う場面において、彼の女性観がどれほど変わったのかは定かには描かれない。しかし Niel が、“she [Mrs Forrester] had always the power of suggesting things much lovelier than herself, as the perfume of a single flower may call up the whole sweetness of spring” (164) と感じるように、実際の彼女自身が経験していた以上の幸福感を彼女は Niel に与えてくれていたことを Niel は実感するのである。

## II

Niel はちょうど二十歳で自らの将来を切り開くための技術を身につけるために故郷からマサチューセッツ工科大学のあるボストンへと一度は出ていく。Sweet Water は Niel の少年時代を、ボストンは彼が切り開く未来を象徴する。しかし病身の Captain Forrester と夫の世話や家事に疲れている Mrs



Forrester を助けるために、後にはリウマチで健康が思わしくない叔父の Pommeroy の法律事務所を手伝うために、Niel は一年間休学をし、故郷 Sweet Water に留まることを決める。この時の Forrester 夫妻や叔父の Pommeroy は、いわば Niel を過去の時代精神と人間関係に支配された、彼の少年時代を象徴する故郷 Sweet Water に引き留める力として働く。この休学期間に Niel は少年時代と今後自ら切り開いていく未来との分岐点に立ち、過去に執着することになる。

Niel は大学への進学前にも叔父の法律事務所を手伝っているが、そこで叔父の蔵書で読書をしているうちに建築家を志すことになる。このため Niel が叔父の仕事を手伝った時期は将来の生業のヒントを得た時期でもあり、少年時代から大人への橋渡しの時期と言える。また Niel がそのまま叔父の仕事を継がないことは Sweet Water は彼が大人の時代を過ごす場所ではないことを示唆する。

例えば Captain Forrester が役員を務める銀行が倒産した際、Captain Forrester は自らの財産を失っても預金者たちを守るが、他の若い銀行の責任者たちは自分たちの利益を守ることしか考えない。この時 Captain Forrester の担当弁護士である Pommeroy は、若い世代の責任者たちの利己性を、“I think I’ve lived too long! In my day the difference between a business man and a scoundrel was bigger than the difference between a white man and a nigger” (85) と言って嘆く。Pommeroy は人々の考え方の変化と、それに対応できず Captain Forrester に損失を与えた自分の弁護人としての無能力を嘆くのである。そのため Pommeroy は甥の Niel に、法律に関する職業は汚れているので邪な Ivy Peters のような弁護士にでも任せておき、“clean profession” (86) を持つように勧めるのである。また休暇で大学から Sweet Water に帰省した Niel が最初に出会ったのは Ivy であるが、この時 Ivy は彼に、現在の Sweet Water では非道な法律家は必要だが Niel の目指す職業である建築業の需要はないと言う。実

際に経済的に困窮する Mrs Forrester は誠実ではあるが利益を期待できない Pommeroy を担当弁護士から解任し、あこぎな Ivy に財産の管理を任せるところを選んでいる。こういった Pommeroy や Ivy の言葉は、Niel が将来人々から必要とされる場所も、大人として人生を切り開き生きていく場所も故郷 Sweet Water ではないことを暗示する。だが休学して故郷に身を置く Niel は故郷と新天地の両者に心ひかれることになる。

Niel の休学期間は少年時代や過去に惹かれる迷いを解消していく一年でもある。大学に進学することになった時点での Niel を Sweet Water から送り出す際には、Mrs Forrester は彼に対して、“Take a chorus girl out to supper — a pretty one, mind!” (92) と言って恋愛を楽しむことを勧めている。ところが二年ぶりに帰郷した彼に会った際には Mrs Forrester は彼に対して多くの女性と交際するのはいいが、一人だけの恋人を作ってほしくはないと言うことを冗談めかして次のように言う。

‘One is too many. I want you to have half a dozen — and still save the best for us! One would take everything. If you had her, you would not have come home at all. I wonder if you know how we’ve looked for you?’ (103-4)

Mrs Forrester は、Niel に対し、本気で一人の恋人を愛し、自分達夫婦や故郷のことを忘れてしまうことなく、故郷の人々を思う余地を残しておいてほしい気持ちを伝えることで Niel の気持ちを少年時代と過去に誘い引き付ける。

だが Niel の休学期間に病身の Captain Forrester は回復することではなく、西部開拓者の時代が戻ることはないことを象徴するかのよう日々弱っていく。この一年間は Niel にとって Captain Forrester と惜別し、少年時代から理想の女性像であった Mrs Forrester に幻滅していく期間となる。まず Niel にとっては、Mrs Forrester が Ivy の品性が劣っていることを承知で

彼に頼り実利を追求していることが齒がゆい。彼女は Niel に、グレンウッドスプリングで開かれたパーティーで、自分が若々しく美しく映ったことや若い娘たちよりもずっと活発でダンスが上手かったことを憑かれたように語る。この時 Niel は、“When women began to talk about still young, didn’t it mean that something had broken?” (118) と思い、薄気味悪く感じ身震いをする。もはや夫人は Niel にとってあこがれの対象ではなく不気味にさえ映る。Captain Forrester の死後、より生き方が不安定になり、人々の好奇の目にさらされる Mrs Forrester に対して、Niel は夫人の出身地であるカリフォルニアに帰るように勧めるが、この時の Niel にはもうこれ以上夫人の愚かな行いを見たり心ないうわさを聞きたくない、またかつての自分の理想像を夫人本人に壊されたくないという気持ちがある。Miss Ogden と結婚した Ellinger を嫉妬心から電話で罵倒する Mrs Forrester の電話線を夫人の名誉を守るために切ってしまったり、Captain Forrester の回復を少しでも手助けしようとする Niel の行為は、少年時代に強くあこがれゆるぎないものと信じた理想の女性像や価値観を守り抜こうとする行為である。しかし Niel が自分にはそれらを守る力がないことを実感していく過程は、彼の少年時代からの脱皮を意味することになる。

Niel の休学期間は彼が大人になる前のいわば最後のモラトリアム期であり、この間の彼の経験は少年時代と決別するためのイニシエーションと考えられる。Niel はこの期間に精いっぱい子供時代に信じた価値観や幸福を守ろうとしたが Captain Forrester の死と夫人への幻滅は避けられない現実となる。

### III

少年時代の Niel にとって誠実でたくましい Captain Forrester とその美しい妻である故に魅力的な Mrs Forrester は、ゆるぎない存在であり理想であった。だが Captain Forrester の落馬事故による鉄道建設からの撤退、彼が役員を務める銀行の倒産、病気などにより、Captain は社会的にも肉

体的にも力を失い、夫人は他の男性に心を迷わせる。Forrester 家の財産管理を任される Ivy は、Captain Forrester や Pommeroy のような馬鹿正直な生き方は通用しない時代だと公言する。そして、インディアン土地をだまし取るような Ivy のやり方を不正だと分かっているながら彼に頼る Mrs Forrester も、夫や Pommeroy のような信念を持った生き方ではもはや暮らしていけないということを Niel に次のように言う。

‘... I’ve no doubt it’s crooked. But the Judge is like Mr Forrester; his methods don’t work nowadays. He will never get us out of debt, dear man! He can’t get himself out.’ (116)

Niel 自身も西部開拓時代の人々の生きにくい様子を、“The Old West had been settled by dreamers . . . strong in attack but weak in defence” (100) と感じている。

しかし一方で Niel は Ivy のやり方にも Ivy のような男に迎合する夫人にも強い反感を覚える。つまり Niel は、時代精神の変化や自分もまた将来の職業を開拓する必要があることを頭では理解しながら、やはり Captain Forrester が体現する時代精神を心から理想と思うという矛盾を抱えているのである。過去の時代精神と不鮮明な未来の分岐点に立つ Niel の様子を Joseph R, Urgo は、“with the collapse of the Forrester Household Niel comes to a crossroads: the past is dying, its value proven temporal and made insufficient by the course of events. At the same time the future seems diminished, and its destination, charted by Ivy Peters, is uncertain” (Urgo 81) と述べる。そこで最後に時代の分岐点で戸惑う Niel と彼の抱える矛盾に注目したい。

この作品の中で Captain Forrester をはじめ鉄道建設の仲間である Cyrus Dalzell、Forrester 家の顧問弁護士である Pommeroy は、西部開拓

時代の時代精神を体現する人々であり、それに対して Niel を含む少年たちや若者たち、時代の変化に対応して生きようとする Mrs Forrester、Ellinger、Ivy らは、次の別の時代を生きる人々と位置付けられる。そしてこの作品では Mrs Forrester という個人の人生以上に、時代の変化がテーマとなっていると考えられる。

故郷にいる時の Niel が Forrester 家のパーティーに招かれる場面では、Captain Forrester は、“Happy days!” (46) と言い、皆の幸せを願って乾杯をする。後に大学進学のために故郷を出る Niel を祝福して送り出す際にも Captain Forrester はこの言葉を使うが、彼が健在である限り、この言葉を発する彼に関わる人々は、ゆるぎない精神で成功をつかんだ彼の存在に守られ、祝福されていると言える。Captain Forrester の人生における信条は、人が熱心に思い描き計画したことはいつかかなうというもので、彼は Niel に、“my philosophy is that you think of and plan for day by day . . . you will get” (49) と説くのである。Captain Forrester の人生哲学は西部開拓者達の信条であり、彼はさらに “All our great West has been developed from such dreams” (50) という。Captain Forrester が繰り返して使う “dreams”、“dreamed” という言葉は、Captain Forrester によって代表される西部開拓時代の世代の人々の志の高さや純粋さを表している。彼によって守られていた Forrester 家の幸福は少年時代の Niel にも幸福感をもたらしているのである。休学し、Captain Forrester の衰弱を食い止める手助けをしたいと願う Niel は、時代精神の変遷を感じつつ、自分に幸福感を与えてくれた価値観とアメリカ人の理想の終焉を認めたくないという矛盾を、この間抱えることになる。

かつて理想化した Mrs Forrester が、経済的余裕がないせいで Ivy に頼るだけならまだしも、Ivy と男女として親密になることが Niel には理解できず、彼はそんな夫人に失望する。夫を失った後もまだ若い Mrs Forrester が女性として男性を求めることは一つの現実であるが、Niel はその現実を

受け入れることはできない。また彼は、夫人が時代の変化とともに生きようとするこゝとやより若い世代の女性に負けまいように若々しくいようとするこゝとも許せない。そして彼は、時代の変遷を察知しながら、Mrs Forrester が時代の現実とともに変わることは認めたくないという矛盾した思いを持ち続けることになる。

Mrs Forrester は、Forrester 家が経済的に困窮して以降は、不正な弁護士である Ivy に財産管理を任せ、少しでも財産を増やそうとする。また Captain Forrester の死後は、それまで住んでいた家を過剰評価と思われるほどの高い値段で売りさばこうと計画する。そして夫人は少年時代の Niel には決して言うことのなかった金銭についての自分の考えを彼に次のように語るのである。

‘Money is a very important thing. Realize that in the beginning; face it, and don’t be ridiculous in the end, like so many of us.’ (106)

この夫人の金銭観は、夫人がロマンティックな夢の中の人物ではなく、商業化の進む資本主義社会の現実を生きていかなければならない未亡人であることを示している。経済的な困窮に陥った場合、金銭を少しでも得ようと努力することや、金銭の大切さを痛感することは社会で生きる人間にとって当然のことであっても、Niel には夫人がこのような金銭観を持つことさえ彼女に対して幻滅する理由となる。

もちろん Niel が生きる時代と社会において、働き、資産の運用に努めなければ金銭が手に入らないのは当然のことである。そのため金銭を手に入れようと努める夫人を批判視する Niel の気持ちは社会で生計を立てようとする人々の当たり前の営みを否定するようなものである。夫人を恵まれた特権階級に属する人として特別視したいという現実社会と矛盾する理想を、もは

や少年ではないはずの Niel は捨てることができてはいない。このような Niel の気持ちは Captain Forrester が役員を務める銀行が倒産し彼が財産を失った際に、Niel が夫人に対して “She was one of the people who ought always to have money” (76) と思う箇所に表れる。Niel は何不自由なく暮らす彼女に魅かれたのだが、特権階級が存在すると考えたことは幻想であり、また夫人は金銭を失ったならばそれを取り戻そうとすることも、そのために不正な弁護士に迎合することもできる現実性とたくましさを持っているのである。夫人の金銭観は、現実には存在しない保証された幸福、特別な人格を備えている特権階級の女性といったものへの Niel のあこがれの気持ちを碎き、彼を現実へと引き戻す。

Captain Forrester や叔父などの大人が体現する時代精神によって守られていた Niel の少年時代の生活は、美しい自然の風景や仲間との明るいピクニックの様子、その中に美しい絵画のように優美に登場する Mrs Forrester の魅力などが相まって、一つのアルカディアを思わせる。Cather がこのような子供たちの様子や、子供の目線を描く理由について、Mona Pers は次のように説明する。

Willa Cather seems to have already decided that real love can only exist in childhood. (41)

It is mainly through the children that the reader learns about the natural beauty of the landscape. (51)

Pers によれば、子供の登場人物は最も純粋な幸福感を持つことができる。Niel もまた子供時代の単純で直感的な判断で、現実とは関係なく彼にとって真に理想となる美や幸福を知ったと言えよう。彼は西部開拓時代の精神の理想を Forrester 夫妻の中に見ていたが、時代の変化やそれに伴う夫妻の変化を見て理想と現実の乖離に戸惑い迷わざるを得なかった。だが Niel が建築業という故郷では経験することのなかった仕事を志し、新天地で将来を切

り開こうとすることは彼なりの開拓精神の表れと言え、彼が Captain Forrester から学んだ開拓精神は新たな時代を生きる彼の中で息づいている。すると時代の分岐点にあつて Niel が過去の時代精神に対して抱く憧憬やそれゆえの現実の社会を生きる中での葛藤は、かつて彼が Forrester 家で学んだ開拓精神を自分の将来を開拓していくための原動力へと置き換えていくことで一部は解決されていくと考えられるのではないだろうか。

### 結び

休学期間の最後に Mrs Forrester と Ivy の情事を目撃したことで失望した Niel は夫人に別れの挨拶もせず故郷を去り、それが永遠の別れとなる。その後年月を経て夫人が世を去り、彼女が文字通り時代とともに生きていくことのできない人になってから、Niel は彼女を過去の素晴らしい思い出と考えることができる。少年時代の理想の美や幸福を体現する夫人がもうこれ以上変化しない一つの閉じられた過去の思い出となったことで、Niel は少年時代に感じた幸福が変わることのない確かなものであると結論付け、その幸福な思い出を携えつつ過去とは切り離された新たな時代の現実を生きていくことができるだろう。

進行していく時の流れから Mrs Forrester が外れて過去の一部となったことは、ある意味夫人が「古い時代とともに死んでほしかった」と願う Niel の希望通りになったと考えられる。だが夫人自身に自分の理想を踏みにじられたくないとの気持ちから夫人の醜態が世間にさらされることを心配した頃とは違い、夫人が再婚相手から最後まで大切にされていたことをうれしく思う Niel には少年時代の自分を幸福にしてくれた夫人に対する感謝の気持ちと愛がある。

産業化と商業化の進むアメリカ社会で利潤を得ようとする Ivy が知恵を働かせるように、Captain Forrester の生きた時代においては努力と誠意が未来を切り開くという Captain の信念は理想主義的であるというよりは、む



しろ厳しい現実を生き抜くための現実在即した知恵であった。現在進行中の、つねに変化の途上にある社会の現実、過去に比べて劣るものでも嘆かわしいものでもなく、人々を苦しめるが、なおたくましく新たな理想を抱かせるものであるという、作者 Cather のメッセージが読み取れる。Niel は一人の女性の生き方を見つめ続けることを通して、彼の “Bildungsroman” を完成させているのである。

※本稿は2008年10月26日の日本英文学会九州支部第61回大会において口頭発表を行った際の原稿に加筆、修正を加えたものである。

#### 註

- 1 この二人の人物の類似については Elaine Smith も、“He (Niel) believes, as Strether did of Mme. de Vionnet, that she is faithful to her husband” (Smith 148) と指摘する。また Frances W. Kaye も、“Niel Herbert . . . becomes merely an onlooker” (Kaye 145) と述べる。さらに Elizabeth Shepley Sergeant は James Thurber の指摘をとりあげ、Mrs. Forrester と Madame de Vionnet の類似点について述べている (Sergeant 186)。
- 2 A. Elizabeth Elz もまたこのような Niel による夫人の理想化を、“Niel tries to place Marian in a museum case where she cannot change and will remain as she always appears to him. Marian, then, is elevated to a Madonna-like position where she has all of the holy but none of the sexual attributes of a woman” (Elz 19) と指摘する。
- 3 Samantha C. Cardwell は夫人の活発な生き方について、“For Mrs. Forrester there is nothing more terrifying than standing still” (Cardwell 41) と述べる。

#### Works Cited

- Cardwell, Samantha Carmen. *Willa Cather's Use of The Male Perspective in "My Antonia" and "A Lost Lady"*. Ann Arbor, Michigan: UMI, 2001.
- Cather, Willa. *A Lost Lady*. London: Virago, 2006.
- Elz, A. Elizabeth. *Kate Chopin's "The Awakening" and Willa Cather's "A*

- Lost Lady*: *The Evolution of the New Woman*. Ann Arbor, Michigan: UMI, 2001.
- Kaye, Frances W. *Isolation and Masquerade: Willa Cather's Women*. New York: Peter Lang, 1993.
- Murphy, John J. *Critical Essays on Willa Cather*. Boston: G. K. Hall & Co., 1984.
- Pers, Mona. *Willa Cather's Children*. Stockholm: Uppsala, 1975.
- Sergeant, Elizabeth Shepley. *Willa Cather a Memoir*. USA: University of Nebraska Press, 1963.
- Skaggs, Merrill Maguire. *After the World Broke in Two: The Later Novels of Willa Cather*. London: University Press of Virginia, 1990.
- Smith, Elaine. *Ideals and Imagination in the Novels of Willa Cather*. Ann Arbor, Michigan: UMI, 1986.
- Urgo, Joseph R. *Willa Cather and the Myth of American Migration*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1995.